

意思決定における身体状態の役割

西堤 優

東京大学大学院総合文化研究科博士課程

最新の脳科学の知見によれば、私たちの合理的な意思決定は、理性の働きのみによってなされているのではなく、その対極にあると考えられてきた情動の働きが深く関与している。実際、情動を誘発するために決定的に重要な部位である前頭前腹内側部(VMPFC)を損傷した患者は、知能を測る様々な心理テストにおいて好成績をおさめながら、肝心の行動場面では適切な意思決定や行動ができない。つまり、情動が欠如すると、知的な能力は健全でも、意思決定や行動には異常がでるのである。この研究分野を代表する神経科学者 A. R. Damasio は、この点に注目して「ソマティック・マーカー仮説(SMH)」を提案した。

SMHでは、意思決定に重要な影響を与える情動は、(1)ある状況に直面したときに自動的に生じる身体状態の変化と、(2)脳に伝えられたその身体状態の変化の情報という二つの要因から構成される。そして、情動の役割は外界の対象の価値を評価し、それに基づいて意思決定にしかるべき影響を与える点にあるとされる。また、J. Prinz も、情動は身体状態の変化を通じて外界の対象の価値評価を行うものであると主張する。たとえば、ヘビに遭遇した場合に引き起こされる恐怖の情動は、恐怖に特有の身体状態の変化を通じて、ヘビが危険であるという価値評価を行っているのである。

ここで意思決定に影響を及ぼす価値評価として、同じ内容をもちながらも、異なる種類の価値評価が三つ考えられる。たとえば、ヘビに遭遇したときに、(1)ヘビとの遭遇によって身体変化を含む恐怖の情動が引き起こされ、「危険だ」という価値評価が形成されるかもしれない。また、(2)身体状態にはいかなる変化も生じないのに、身体変化の情報が伝達されたときと同様の脳状態(つまり、あたかも身体変化を示すような脳状態)が実現されて、「危険だ」という価値評価が形成されるかもしれない。最後に、(3)いかなる身体状態の変化も生じず、またあたかも身体状態の変化を示すような脳状態も形成されず、ヘビに関する知識によって「危険だ」という知的な価値評価が行われるかもしれない。

では、これらの(1)~(3)の価値評価の違いは、意思決定にどのような異なる影響を及ぼすのだろうか。第一に、ケース(1)は身体状態の変化を含む点に特徴がある。この身体状態の変化によって形成される新たな身体状態は、対象の価値に応じた行動の準備となるような状態である。ヘビに遭遇したときに形成される新たな身体状態は、ヘビが危険だという価値評価に応じた行動、すなわちヘビから逃げるといった行動の準備となる状態である。身体状態がこのようにすでに逃げるための準備状態にあるということは、逃げるといった意思決定の形成を強力に推進し、逃げないといった意思決定の形成を困難にする。ケース(1)は、身体状態の変化を含む

ので、それを含まないケース(2)や(3)と比べて、意思決定に及ぼす影響が大きいと考えられる。

第二に、ケース(2)は、身体状態にはいかなる変化も生じないのに、それが生じたときと同様の脳状態が実現される点に特徴がある。このケースがどのように生じるかを確認しておこう。SMHによれば、ケース(1)に示されている「身体ループ」とは別に、「仮想的身体ループ」と呼ばれる情動プロセスがあるとされる。「仮想的」と呼ばれるのは、現実には身体状態の変化が生じるわけではないにもかかわらず、当該の身体状態の変化の情報が伝達されたときと同様の脳状態が実現されるからである。このループで「仮想的」に情報として伝えられる身体状態の変化は、現在の身体状態の変化ではなく、過去において実際に生じた身体状態の変化である。「仮想的身体ループ」では、この過去の記憶が呼び起こされているだけであり、いわば過去の身体状態の変化の「再放送」であって、現在の身体状態の変化の「生放送」ではない。SMHでは、「仮想的身体ループ」の脳状態が現在の意思決定に影響を及ぼすという点では「身体ループ」との間に違いはないと考えられているものの、「身体ループ」の場合には、同じ状況に出会っても微妙に異なる身体状態の変化が形成される可能性があることが強調されている。つまり、「仮想的身体ループ」で形成される仮想的情動は紋切り型であり、「身体ループ」で形成される情動は創造性がある。したがって、ケース(1)の価値評価が意思決定に対してその都度、微妙に異なる創造的な影響を及ぼしうるのに対し、ケース(2)の価値評価はつねに同じ紋切り型の影響しか及ぼすことができないのである。

最後に、ケース(3)は、身体状態の変化についての情報をいかなる仕方でも含まないような純粋に知的な価値評価である点に特徴がある。このケースの価値評価が意思決定にどのような影響をもたらすかを考察するには、Damasioが詳細に記述した VMPFC 損傷患者エリオットの話が参考になる。エリオットは純粋に知的な判断に関しては何の問題もないにもかかわらず、単純な行動選択の場面でさえ、しばしばまったく意思決定ができない。この事実は、知的な価値評価だけでは意思決定ができないことを示しているように思われる。知的な価値評価は、情動的な価値評価と違って、純粋な信念と同じく、それ自身では動機づけの力をもたない。したがって、それだけでは意思決定に至らない。ケース(3)の知的な価値評価は、ケース(1)や(2)の情動的な価値評価とちがって、意思決定のプロセスを左右しうるものの、それだけでは意思決定をもたらさない。それは、信念と欲求の区別からいえば、信念に類するものなのである。

本発表では、以上の三つケースをより詳細に検討することにより、意思決定における身体状態が演じる役割を明らかにしていきたい。